

## モンゴル語の母音調和と母音の弱化 —外来語を用いた分析—\*

植田尚樹

### 1 はじめに

モンゴル語には、母音調和と母音の弱化という、母音に関して特徴的な2つの現象がある。

モンゴル語の母音調和については数多くの研究があり、モンゴル語固有の語（以下「本来語」）の母音配列、および接尾辞の交替形の選ばれ方については、ほぼ確立された法則がある。しかし、外来語の中には母音配列の原則に従っていない語（以下「例外語幹」）がある。その場合でも、接尾辞が付く場合には母音調和による交替形からいずれかが選ばれなくてはならないが、その選ばれ方について十分な研究がなされているとは言い難い。

一方の母音の弱化は、第2音節以降の短母音が著しく弱化するという現象である。モンゴル語の短母音は、第1音節に現れた場合には音声的に明瞭に発音されるのに対し、第2音節以下では著しく弱化して、音声的に不明瞭になる。また、形態論的過程や発話スピードによって、弱化母音の有無や出現する位置が変わる。

- (1) [uxɛr] 《牛》                      [amrɛx] 《休む》  
    [uxre:s] 《牛から》              [amɛrtʃ] 《休んで》              (斎藤 1984: 57)

このような弱化母音に対して様々な音韻解釈がなされているが、これまでのところ外来語に関する記述や分析は数が少ない。

本稿では、モンゴル語ハルハ方言（いわゆる「標準モンゴル語」、以下「モンゴル語」）の外来語のデータを用い、①外来語、特に例外語幹に対する接尾辞の母音調和はどのような法則に支配されているのか、②外来語でも母音の弱化は起こるのか、③母音調和と母音の弱化には相互関係があるのか、という点を、2つの調査から探る。そして、①接尾辞の母音調和は、i, ê, e を除く語幹末の母音が接尾辞の母音を決

\* 本稿は、平成23年度に京都大学大学院に提出した修士論文「モンゴル語の母音調和と母音の弱化—外来語を用いた分析—」に、修正を加えたものである。執筆に当たり、2名の査読者から大変有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝申し上げます。

定することを基本としながらも、アクセントや語幹末からの距離、語の定着度等の要因が相互に作用し、ランキングのない規則が競合していること、②体系的ではないものの、外来語でも語によっては母音の弱化が起こること、③母音調和と母音の弱化には相互関係があること、を示す。

なお本稿における表記は、特に断らない限り、キリル文字による正書法をローマ字転写したものである。転写方法は付録1に示す。

## 2 音韻体系

### 2.1 母音体系

モンゴル語の母音の音素、および代表的な音声、キリル文字との対応、キリル文字の転写を以下に示す。(以下では、< >は文字転写を表す。)

音素	音声	キリル文字	転写
/i/	[i]	и	<i>
/u/	[u]	у	<u>
/o/	[o~o]	у	<o>
/e/	[i~e]	э	<e>
/o/	[e]	ө	<o>
/a/	[a]	а	<a>
/ɔ/	[ɔ]	о	<ɔ>

Svantesson et al. (2005) は、短母音の i と e はハルハ方言で合流しているとし、第1音節の短母音音素として e を認めない<sup>1</sup>。

(2) the short vowels written with the Cyrillic letters и<i> and э<è> have merged to a vowel with the quality [i] in Ulaanbaatar Halh. (Svantesson et al. 2005: 6)

筆者も/e/が[i]と発音されている例は確認したが、全ての語、全ての話者において i と e が合流したかどうかについては不明である。また、以下のような例では、下線部の母音の発音は明らかに異なる。

<sup>1</sup> 長母音、および第2音節の音素的母音には i (i:) と e (e:) の対立を認めている。

- (3) *import* [import] 《輸入》  
*eksport* [eksport] 《輸出》

したがって本稿では、/i/と/e/は異なる音素として扱う。なお、この問題に関しては5.2.1で詳しく扱う。

長母音は/i:, u:, ʊ:, e:, o:, a:, ɔ:/、二重母音は/ui, oi, ei, ai, oi/である。(oi/という二重母音はない。) なお以下では正書法に基づき、長母音は短母音の連続で表記する。

## 2.2 母音調和

### 2.2.1 母音配列

母音調和については、韻律理論を用いた Steriade (1979) や、自律分節音韻論を用いた Goldsmith (1985)、分節音の内部構造の階層性を考慮に入れた van der Hulst and Smith (1987)、実験音声学の手法を用いた城生 (2005)、contrastive hierarchy の枠組みを用いた Ko (2011) など、様々な研究がなされてきた。その結果、本来語の母音配列については、ほぼ確立された法則がある。

女性母音 (+ATR<sup>2</sup>) . . . /e, o, u/

男性母音 (-ATR) . . . /a, ɔ, ʊ/

中性母音 (+ATR) . . . /i/

[±ATR]の調和<sup>3</sup>：女性母音と男性母音は共存できない。中性母音は、初頭音節以外の位置では透明 (transparent) な母音であり、母音調和に無関係である。初頭音節では女性母音として機能し、後続する母音は必ず女性母音である。

円唇性の調和：円唇広母音 o/ɔ の出現にかかわる。初頭音節の母音が o/ɔ の時にしか第2音節以降に o/ɔ は現れない。円唇狭母音 u/ʊ は、自らは円唇母音であるにもかかわらず、円唇性の調和を妨げ、後続する母音に非円唇母音を要求するという意味で不透明 (opaque) な母音である<sup>4</sup>。

<sup>2</sup> Svantesson et al. (2005) は[pharyngeal]の素性を用い、Ko (2011) は[±RTR]を用いている。[ATR]とは+と-が逆になるが、実態は同じものと考えられる。

<sup>3</sup> open-close の調和 (Hattori 1982) や、front-back の調和 (Goldsmith 1985 など) とした先行研究もあるが、現在では[±ATR]の調和であるという解釈が広く受け入れられているため、本稿でも[±ATR]の調和と捉える。

<sup>4</sup> Svantesson et al. (2005) によると、ウランバートルの口語では非円唇狭母音 i も円唇調和を妨げる場合がある。その原因として、初頭の円唇母音と、調和している母音との間の隔たりが挙げられている。

## 2.2.2 接尾辞の母音調和

母音調和の領域は、語幹内のみならず、接尾辞にまで及ぶ。その結果、ほとんどの接尾辞は母音調和による交替形を持つ。(各接尾辞の右上に付された数字は、母音調和による異形態の数を示している。)

(4) 奪格接尾辞-aas<sup>(4)</sup> (-aas/-ɔɔs/-ees/-oos) 《～から》

複数接尾辞-ood<sup>(2)</sup> (-ood/-uud)

接尾辞の母音は、語幹末の母音によって決まると考えられる。その根拠として、以下に複合語の例と、接尾辞が2つ以上連続する例を挙げる。

複合語では、後部要素の母音が接尾辞の母音を決定する。

(5) oworxangai 《ウブルハンガイ (地名)》 → oworxangai-g-aas<sup>5</sup>

<owor 《山腹》 + xangai 《森林肥沃地帯》

2つの接尾辞が連続する場合、2つ目の接尾辞の母音は、語幹の母音ではなく、1つ目の接尾辞の母音に調和する。(6) は、母音調和による交替形を持たない接尾辞-gui に、分離副動詞形を作る接尾辞-aad<sup>(4)</sup> (-aad/-ɔɔd/-eed/-ood) が後続した例である。

(6) awax-gui-g-eed 《取らないで》 \*awax-gui-g-aad

取る - 否定 - 介入子音 - 分離

(7) は、o/o を持つ語幹に、使役接尾辞-uul<sup>(2)</sup> (-uul/-uul) と、分離副動詞形を作る接尾辞-aad<sup>(4)</sup> (-aad/-ɔɔd/-eed/-ood) が付与された例である。

## (7) ɔr-uul-aad 《入らせて》 \*ɔr-uul-ɔɔd

入る - 使役 - 分離

og-uul-eed 《与えさせて》 \*og-uul-ood

与える - 使役 - 分離

(6) (7) ではいずれも、語幹に1つ目の接尾辞が付与された際、新しい語幹(awaxgui / ɔroul / oguul) が形成され、その新しい語幹の末尾の母音に従って、2つ目の接尾辞の母音が決定される、と考えることができる。

<sup>5</sup> g は母音の連続を避ける介入子音である。(以下同様)

以上のことから、接尾辞の母音は語幹末の母音によって決定されると考えられる。語幹末母音と接尾辞の母音との対応は、以下の通りである。代表として、例に-aas<sup>(4)</sup>と-uud<sup>(2)</sup>を挙げる。

表 1：語幹末母音と接尾辞の母音との対応

接尾辞の例 語幹末母音	-aas <sup>(4)</sup> (-aas/-ᠠᠠᠰ/-ees/-oos)	-uud <sup>(2)</sup> (-uud/-uud)
a, ʊ	-aas	-uud
ɔ	-ᠠᠠᠰ	
e, u, (i)	-ees	-uud
o	-oos	

(i)は、語幹に含まれる母音が i のみの場合。それ以外の場合、i は無視される。

### 3 外来語における母音調和と母音の弱化

#### 3.1 外来語に対する接尾辞の母音調和

表 1 に接尾辞の母音の選ばれ方を示したが、外来語に接尾辞が付与される場合、表 1 のとおりにならない例がある。3.1.1 に筆者が行った予備調査の結果、3.1.2 に先行研究に見られる例を挙げる。

##### 3.1.1 予備調査

予備調査として中国内モンゴル出身の内モンゴル語話者に調査を行ったところ、外来語では表 1 の通りにならない語があった。その一部を挙げる。

- (8) paspoᠷt 《パスポート》 → paspoᠷt-aas (\*paspoᠷt-ᠠᠠᠰ)<sup>6</sup>  
 mastêᠷ <sup>7</sup> 《職長・名人》 → mastêᠷ-aas (\*mastêᠷ-ees)  
 kᠤnsul 《領事》 → kᠤnsul-ᠠᠠᠰ (\*kᠤnsul-aas)

これらの例では、語幹末の母音が接尾辞の母音を決定していない。

<sup>6</sup> 本稿において\*は、「予測されるが実際には話者が用いなかった語形」を示す。なお、本稿に関わる調査では、予測される形について、話者に対して「この形でも許容できるか」という確認は行っていない。話者から得られた語形と許容される語形に違いがあるかということについては、今後研究が必要である。

<sup>7</sup> /ɛ/[e]は内モンゴル語において、外来語のみに用いられる音素である。内モンゴル語の/e/[ɛ]で実現される。

### 3.1.2 先行研究 (モンゴル語)

モンゴル語において、外来語に対する接尾辞がどのように選ばれるか、という点について言及した先行研究を、以下に示す。

橋本 (1982) は以下の例を挙げ、「調和素性は、語幹末の母音によって付与される」(橋本 1982: 587) としている。

#### (9) Stems — Ablative

- a) tsemodaan — aas ‘from the suitcase’
- b) Tomortogoo — goos ‘from Tomortogoo (personal name)’
- c) Dašintšilen — ees ‘from Dašintšilen (place name)’
- d) Šaraxob — oos ‘from Šaraxob (place name)’

(橋本 1982: 86 (12) 表記は改変)

また橋本 (1982) は kapitalizm 《資本主義》 → kapitalizm-ees という例を挙げ、通常は母音調和にかかわらない i でも、原語でアクセントを持つ場合には母音調和を引き起こし、接尾辞の母音に e が選ばれることがあると述べている。

Svantesson (1985) には、ロシア語からの借用語では、ロシア語でアクセントを持つ母音が調和を決定しているという記述がある。

#### (10) Suffixes often follow the harmony class of the vowel which is stressed in Russian.

(Svantesson 1985: 308)

ただし Svantesson (1985) は、多くの例外や不規則性があり、すべてのケースをカバーする一般的な規則は立てられないとしている。

### 3.1.3 先行研究 (他言語)

本節では、他言語における例を概観する。母音調和を持つ他の言語では、外来語に対して接尾辞の交替形が選ばれる際に、どのような要因が関わっているかをまとめ、モンゴル語の分析にも生かすことが目的である。

#### 3.1.3.1 トルコ語

Kirchner (1993)、Sasa (2011) によると、接尾辞の母音は語幹末の母音と調和する。また林 (1989) にも、「語幹の最終母音と接尾辞の間にも、母音の共起に関する制約がある」(林 1989: 1386)「外来語に対しても、わずかの例外を除き、規則的に適用される」(同: 1387) との記述がある。

### 3.1.3.2 ハンガリー語

ハンガリー語の母音調和は前舌 - 後舌の調和であり、接尾辞の母音は基本的に語幹末の母音によって決まる (Kontra and Ringen 1986, Ringen 1988)。

しかし、外来語では異なる結果が出るという報告がある。Kontra and Ringen (1986) は、語末に2つの中性母音がある外来語では、本来は母音調和を引き起こさないはずの中性母音が調和を引き起こし、ほとんどの場合に前舌母音を含む接尾辞が選ばれる<sup>8</sup>こと、少なくとも外来語では強勢母音が接尾辞の母音に影響を与えていることを指摘している。また Nevins (2010) は、本来語であっても、中性母音の音節を2つ挟むと[+back]の調和がブロックされるバリエーションをもち、1人の中でも語彙や社会言語学的な条件によってゆれがある、と述べている。

つまり、ハンガリー語の接尾辞の母音調和は、語幹末母音を基本としながらも、語末からの距離やアクセントが関係している。ハンガリー語のアクセントは語の第1音節にあり外来語でも同様である<sup>9</sup> (Kontra and Ringen 1986, Nevins 2010) ので、ここで言うアクセントとは原語のアクセントではなく、ハンガリー語内のアクセントである。

### 3.1.3.3 フィンランド語

フィンランド語も前舌 - 後舌の母音調和で、接尾辞の母音は基本的に語幹末の母音によって決定される。しかしフィンランド語でも、外来語に対してはいくつかの例外が認められる。具体的には、前舌母音で終わる外来語に対して、接尾辞に後舌母音が選ばれることがあり、‘inter and intraspeaker variation’ (Välímää-Blum 1999: 247) が見られる。

この理由として、Välímää-Blum (1999) はリズムや発話スタイル、情報構造、発話速度を要因に挙げている。Ringen and Heinämäki (1999) は、母音の位置のほか、第1強勢、第2強勢、母音の聞こえ度が影響しており、これらはランキングのない制約の競合であると指摘している。また Nevins (2010) は、接尾辞の違いは方言差だとした上で、その方言差は聞こえ度の低い母音を透明な母音とするか否かの差である、と述べている。

つまり、フィンランド語もハンガリー語と同様に、語幹末母音を基本としながら、アクセントや母音の聞こえ度、発話スタイルなどが関係していることがわかる。

フィンランド語では、主強勢は原則として語の第1音節に置かれる (松村 1992: 674)。外来語のアクセントについては、Ringen and Heinämäki (1999) に挙げられてい

<sup>8</sup> ハンガリー語の中性母音は/i/と/e/であり、音声的には前舌母音である。

<sup>9</sup> 外来語のアクセントについての明確な記述はないが、Kontra and Ringen (1986) と Nevins (2010) は外来語でも第1音節に強勢があるものとして分析している。

る外来語の例には全て第 1 音節に主強勢の符号が打ってある<sup>10</sup>ことから、本来語と同じようなアクセントに変化するようである。つまりフィンランド語の場合も、原語のアクセントではない。

### 3.2 母音の弱化との関連性

先述したように、モンゴル語では第 2 音節以下の短母音は弱化する。その弱化母音の音素について、これまで様々な説が提唱されてきた (Street 1963, 角道 1974, 斎藤 1984, Svantesson et al. 2005 など)。しかし、外来語の母音の弱化について扱った研究はわずかであり、分析も十分であるとは言いがたい。

内モンゴル語話者では、外来語でも第 2 音節以下の短母音が弱化し、さらに母音調和と母音の弱化に関連性が認められる例があった。

(11) *nomêr* 《番号》 → [nomera:s] ~ [noməɾɔ:s]

この話者は *nomêr* 《番号》という外来語に対して [nomera:s] と [noməɾɔ:s] の両方を許容し、「母音が弱化した場合としない場合で接尾辞が異なる」と述べた<sup>11</sup>。被験者が 1 人であることから、この事実をもって「母音調和と母音の弱化には関連性がある」と断言することは避けなければならないが、少なくとも関連性を示唆するデータではある。

### 3.3 考慮すべき要因

3.1.2 ではモンゴル語、3.1.3 では他言語に関して、外来語に対する接尾辞の母音調和についての先行研究を概観し、接尾辞の母音調和に関連があると思われる要因を挙げた。また 3.2 では、接尾辞の母音調和と母音の弱化に関連性がある可能性が示された。これらをまとめると、外来語に対する接尾辞の母音調和に影響を与えている要因として、以下のようなものが考えられる。

語幹末の母音

原語でアクセントを持つ母音

モンゴル語でアクセントを持つ母音

語末からの距離

<sup>10</sup> #(C<sub>0</sub>)ie-に始まる外来語では e にアクセント符号がある (hiérogly'fi 'hieroglyph') が、この位置は本来語でも同様 (tié-llä 'road-adessive') である。

<sup>11</sup> 母音が弱化しない場合、母音 ê に調和する e が接尾辞の母音として期待されるにもかかわらず、この話者では a が選ばれている。これは、5.3.4 で述べる「デフォルトの母音」であると考えられる。



母音の聞こえ度

リズムや発話スタイル、情報構造、発話速度

母音の弱化との関連性

この中で、どの要因がどの程度影響しているかを明らかにするため、調査を行った。

## 4 調査

### 4.1 外来語の音声と表記

調査内容に先立ち、モンゴル語に見られる外来語の概要を述べておく。

モンゴル語に最も多い外来語は、ロシア語からのものである。それらは主にソビエト時代に借用された。また最近では、市場経済への移行に伴い、英語からの借用語が増加している (塩谷・プレブジャブ 2001)。

表記の面では、末尾の強勢のない母音が消去されることがある (例: *лoгика* > *логик* 《論理学》) などの例外はあるが、ロシア語と同じように綴られるものが多い。

一方の音声面では、ロシア語でアクセントのある母音は、モンゴル語において長母音で発音される。またロシア語で *u* を持つ語は、モンゴル語では /u[u] または /o[o~o] のいずれかとなり、その発音は語ごとに決まっている。

(12) ロシア語 *kúrs* > モンゴル語 [ku:rs] 《学年》

ロシア語 *minút* > モンゴル語 [mino:t] 《(時間の) 分》

また母音 *e* に関して、モンゴル語とロシア語におけるキリル文字と音素の対応は以下の通りである。(ロシア語に関しては佐藤 1992 を参照した。)

表 2: 文字と音素の対応

	モンゴル語	ロシア語
キリル文字 <i>э</i> 転写 < <i>e</i> >	/e/	/e/
キリル文字 <i>е</i> 転写 < <i>je</i> >	/je/, 外来語の/e/	/je/, 口蓋化子音の後の/e/

ただし、外来語の /e/ をキリル文字 *э* (転写は *e*) で表す例もある。( *eksport* 《輸出》 など)

モンゴル語において、キリル文字 *e* は /je/ のほか、外来語の /e/ にも用いられる。外来語の /e/ と本来語の /e/ の間で音声的な違いはないが、キリル文字では異なる文字が

用いられているという事実を表すため、本稿では以下のように文字転写する。

キリル文字 *э* — /e/ <e>  
 キリル文字 *е* — /je/を表す場合: <je>  
                   — 外来語の/e/を表す場合: <ê>

## 4.2 インフォーマント情報

インフォーマントは以下の7名である。(年齢は調査時)

	年齢	性別	出身地 (ウランバートルからの距離)	ロシア語	備考
A	22	女	ウランバートル	△	電子メールによる調査
B	21	女	ウブスハンガイ (南西約 350km)	×	
C	22 <sub>※</sub>	男	ウランバートル	○	調査2の時点では23歳
D	19	女	ウランバートル	×	
E	20	女	ウランバートル	○	
F	21	男	トゥブ (南約 100km)	△	
G	20	女	ダルハン (北約 180km)	△	

## 4.3 調査内容

本節では、筆者が行った2つの調査について、その内容と目的を示す。

### 4.3.1 調査1

調査1は綴り字を用いた調査で、調査対象者はインフォーマントA~Gである。まず中嶋(2009)より、できる限り多くの母音配列を含むこと、原語でのアクセント位置に偏りが無いことに留意しながら、ロシア語および英語からの借用語を選んだ。語数は148語(Aは133語)、うち例外語幹は97語(Aは96語)である<sup>12</sup>。それらの語(キリル文字表記)を見せ、それぞれの語に奪格接尾辞-aas<sup>(4)</sup>を付与したものの<sup>13</sup>を、キリル文字で書いてもらった。A以外の6名には発音してもらい、アクセント位置および発音についても調査した。また、提示された語をどのくらいよく知っているか(語の親密度)を、3段階で判定してもらった。(Aからは回答なし。)

この調査には、①外来語、特に例外語幹に接尾辞が付く場合、どの交替形が選ばれるかを確かめる、②外来語でも母音の弱化が起こるか否かを、音声だけではなく

<sup>12</sup> 一覧は付録2を参照。

<sup>13</sup> 外来語が集めやすい名詞に付く接尾辞であること、母音の弱化が起こらず母音の音価が確認しやすい長母音を含むことから、奪格接尾辞-aas<sup>(4)</sup>を用いた。

正書法上からも確かめる、という2つの狙いがある。

この調査は文字を用いた調査であるため、文字の影響が出る可能性がある。実際、予備調査として、インフォーマントCに綴り字を見せずに接尾辞を付与してもらったと、綴り字を見せた場合と異なる結果が出た語があった。

(13) 「映画から」は何と言うか尋ねた場合：[kʰano:na:s]<sup>14</sup>

<kino>という綴りを見せ、接尾辞を付けてもらった場合：<kinogcos>

したがって、文字を用いない調査も行った。

#### 4.3.2 調査2

調査2は、綴り字を全く用いない調査である。調査対象者はインフォーマントC～Gである。被験者に以下の文と日本語<sup>15</sup>の語を示し、それぞれの語をモンゴル語の適切な形（「～から」にあたる、奪格接尾辞を付与した形）に直した上で、以下の文に入れ、文全体を2度読むことを要求した。筆者が意図した語が選ばれるよう、モンゴル語での頭文字を提示し、ターゲットとなる語がモンゴル語で思いつかない場合にのみ、実験者が語を読み上げた。

- ‘Ter [ ] irsen.’ 「彼は[ ]から来た」
  - ‘Bi exleed [ ] uzsen.’ 「私ははじめに[ ]から見た」
  - ‘Bi exleed [ ] sursan.’ 「私ははじめに[ ]から学んだ」
  - ‘Bi exleed [ ] uusan.’ 「私ははじめに[ ]から飲んだ」
  - ‘Bi [ ] exelsen.’ 「私は[ ]から始めた」
- （ターゲットとなる名詞によって、いずれかの文を用いた。）

語は、他言語の母音調和で影響を及ぼしていると考えられている、語末からの距離や母音の聞こえ度等を考慮しつつ、普通名詞を25語（うち調査1でも扱った語が22語）、地名を20語（うち日本の地名が11語、調査1でも扱った語が2語）選んだ<sup>16</sup>。この調査の狙いは、綴り字の影響を排除した状況で、語がどのように発音され、どの接尾辞が選ばれるかを確かめることにある。また、母音の弱化の音声的実現についても確認を行った。

<sup>14</sup> nは「隠れたn」と呼ばれるもので、特定の語が潜在的に持ち、属格、与位格、奪格の接尾辞が付いた時にだけ現れる子音である。以下の例でも同様である。

<sup>15</sup> 被験者は全員日本語を理解できる。

<sup>16</sup> 使用した語は付録2を参照。

なお、調査1と調査2の両方を行ったインフォーマントはC～Gの5人であるが、Cは調査1を行ってから約2ヵ月後に調査2を行ったので、相互の影響はないと考えられる。また、調査1と調査2を同日に行ったD～Gでは、調査2→調査1の順とすることで、調査2への綴り字の影響を排除している。

## 5 結果：接尾辞の母音調和

本節では、接尾辞の母音調和の引き金となる母音について考察する。

### 5.1 語幹末母音との調和

調査1において、語幹末母音と、接尾辞に予測される母音<sup>17</sup>が全員で一致した例を(14)に、インフォーマントごとの一致数を表3に示す。なお、iが透明(transparent)な母音であるという分析は外来語においても成り立つので、以下では母音が全てiである場合を除き、語幹末の母音としてiはカウントせず、その前の母音を語幹末母音とみなす。また<u>については、4.1(12)で示したように[o]と[u]の2種類の発音が語彙的に指定されており、その発音が接尾辞の選択に大きな影響を与えている。以下では、各インフォーマントの発音を基準にoとuに分類している。インフォーマントAについては、発音調査を行っていないため、考察の対象から外した。キリル文字<io>(転写は<ju>であり、[jo]と[ju]の2種類の発音がある)も同様である。

- (14) *général* 《将軍》 → *gênéral-aas*  
*marafɔn* 《マラソン》 → *marafɔn-ɔɔs*  
*êgipêt* 《エジプト》 → *êgipêt-ees*  
*minɔt* 《(時間の)分》 → *minɔt-aas*

<sup>17</sup> 接尾辞に予測される母音は表1参照。

表 3：語幹末母音と接尾辞母音の一致数

語幹末母音		a	ɔ	ê	ɔ	u	i	e	計
接尾辞母音		a	ɔ	e	a	e	e	e	
A 一致	全語幹	32/33	42/42	23/48	-	-	1/1	1/1	99/125
	例外語幹	26/27	34/34	5/30	-	-	-	0/0	65/91
B 一致	全語幹	40/40	45/47	26/48	6/6	1/3	1/1	2/3	121/148
	例外語幹	27/27	32/34	8/30	4/4	0/1	-	0/1	71/97
C 一致	全語幹	38/40	45/47	23/48	4/5	2/4	1/1	2/3	115/148
	例外語幹	25/27	29/34	5/30	3/3	1/2	-	0/1	63/97
D 一致	全語幹	37/40	42/47	25/48	4/5	2/4	1/1	2/3	113/148
	例外語幹	25/27	29/34	7/30	3/3	1/2	-	0/1	65/97
E 一致	全語幹	34/40	44/47	29/48	2/5	3/4	1/1	3/3	116/148
	例外語幹	23/27	31/34	11/30	2/3	2/2	-	1/1	70/97
F 一致	全語幹	38/40	44/47	20/48	5/5	1/4	1/1	2/3	111/148
	例外語幹	25/27	31/34	2/30	3/3	0/2	-	0/1	61/97
G 一致	全語幹	40/40	43/47	21/48	4/6	2/3	1/1	2/3	113/148
	例外語幹	27/27	31/34	3/30	4/4	1/1	-	0/1	66/97

全語幹、例外語幹ともに、語幹末母音が ê であっても接尾辞に e が現れない語幹が、各インフォーマントで多数あった。

(15) kamêr 《部屋》 → kamêr-aas (\*kamêr-ees)

kofê 《コーヒー》 → kofê-n-ɔɔs (\*kofê-n-ees)

よって、少なくとも ê に関しては、語幹の最終母音が接尾辞の母音を決定しているとは言えない<sup>18</sup>。他の母音に関しては、おおそ語幹末母音と接尾辞の母音が表 1 の通りに対応している。

<sup>18</sup> zootêxnîk 《畜産学》は7名とも zootêxnîk-ees と回答したが、これは zoo と têxnîk という2つの語からなる複合語だと考えることができる。(インフォーマント B から、2語からなるという意識があるとの指摘があった。) 2.2.2 で示したように、複合語の母音調和は後部要素によって決定される。têxnîk には母音が ê と i しか含まれていないため、接尾辞の母音には e が選ばれる。インフォーマント A と D は、kilomêtr 《キロメートル》に対して kilomêtr-ees と回答したが、これも同様の理由によると考えられる。

## 5.2 T 母音

### 5.2.1 T 母音の設定

5.1 で、ê を除けば、おおよそ語幹末母音と接尾辞の母音が調和していることが示された。

そこで、ê, e は i と同様に母音調和にかかわらない母音であり、語幹が ê, e のみからなる場合は女性母音として振る舞うと仮定する。母音調和にかかわらない i, ê, e を除いた中で、語幹末に最も近い母音を T 母音と呼ぶことにする。母音 i, ê, e のみを含む語幹の場合、T 母音は初頭の母音となる。

(2) に示したように、ウランバートルのハルハ方言では、i と e が合流しているという報告がある。このことから ê, e が、少なくとも母音調和に関して、i と同様に中性母音であるとみなすことには裏づけがある。

(16) (=2 再掲) the short vowels written with the Cyrillic letters и<i> and э<è> have merged to a vowel with the quality [i] in Ulaanbaatar Halh.

(Svantesson et al. 2005: 6)

しかし、「i と ê, e が、ともに母音調和に関して中性母音である」という事実と、「i と e が合流した」という解釈は、必ずしも一致しない。Svantesson et al. (2005) の述べるように、i と e が完全に合流した（つまり、本稿でいう ê, e は、音素的に/i/である）と考えた方が、一貫性があるように見えるかもしれないが、この解釈は2つの点で受け入れ難い。

第一に、音声的な差異である。(3) に示したように、i と ê, e の音声は（少なくとも外来語においては）異なる。音声的な実現が異なる状況で、完全に「合流した」と言い切るのは無理がある。

第二に、アクセントを持つ母音の振る舞いが説明できない点である。Svantesson et al. (2005) は、第2音節以降の母音体系を「(音素的ではない) 挿入母音と音素的母音との対立」として、原語でアクセントを持つ第2音節以降の母音は、「音素的母音」として解釈する。そして、第2音節以降の音素的母音には、i と e の対立を認めている。以上をまとめると、「原語でアクセントのある母音は、第2音節以降において i と e の対立がある (=i と e は合流していない)」ということになる。

この解釈によれば、第2音節以降に現れる、原語でアクセントを持つ母音 ê, e は、/i/ではなくあくまでも/e/である、ということになる。しかし、この母音は接尾辞の母音調和を（基本的には）引き起こさない。

- (17) ant<sup>h</sup>énn 《アンテナ》 → ant<sup>h</sup>énn-aas (\*ant<sup>h</sup>énn-ees)  
konts<sup>h</sup>ért 《協奏曲》 → konts<sup>h</sup>ért(-n)-<sup>oos</sup> (\*konts<sup>h</sup>ért(-n)-ees)<sup>19</sup>

よって、i と e が合流していない環境においても、ê, e は母音調和に関わらないと解釈せざるを得ない。

i と e の関係に関しては、「e は、母音調和に関しては i の性質に近づいており、その動機は i と e の音声が特定の環境において近いことによる」と考えられる。

### 5.2.2 T 母音との一致率 (調査 1)

T 母音と接尾辞に予測される母音との一致例、およびその語数は以下の通りである。

- (18) arxiw 《公文書》 → arxiw-aas  
kamêr 《部屋》 → kamêr-aas  
amêrik 《アメリカ》 → amêrik-aas  
bênzin 《ガソリン》 → bênzin-ees  
intêrnêt 《インターネット》 → intêrnêt-ees  
elit 《エリート》 → elit-ees

---

<sup>19</sup> (-n)は、人によって隠れた n (脚注 14 参照) が現れることを示している。

表 4 : T 母音と接尾辞母音との一致数 (調査 1)

T 母音		a	ɔ	ê	ɔ	u	i	e	計
接尾辞母音		a	ɔ	e	a	e	e	e	
A 一致	全語幹	49/51	48/52	10/10	-	-	6/6	4/4	117/123
	例外語幹	43/45	40/44	-	-	-	-	-	83/89
B 一致	全語幹	56/58	52/58	10/10	5/5	4/7	6/6	4/4	137/148
	例外語幹	43/45	39/45	-	4/4	2/3	-	-	88/97
C 一致	全語幹	55/58	50/58	10/10	4/5	5/7	6/6	4/4	134/148
	例外語幹	42/45	37/45	-	3/3	3/4	-	-	85/97
D 一致	全語幹	53/58	51/58	10/10	4/5	5/7	6/6	4/4	133/148
	例外語幹	41/45	37/45	-	3/3	3/4	-	-	84/97
E 一致	全語幹	46/58	50/58	10/10	2/5	5/7	6/6	4/4	123/148
	例外語幹	35/45	37/45	-	2/3	3/4	-	-	77/97
F 一致	全語幹	56/58	54/58	10/10	5/5	3/7	6/6	4/4	138/148
	例外語幹	43/45	41/45	-	3/3	1/4	-	-	88/97
G 一致	全語幹	58/58	52/58	10/10	5/6	4/6	6/6	4/4	139/148
	例外語幹	45/45	40/45	-	4/4	2/3	-	-	91/97

表 3 と比較すると、一致率が上がっている。したがって、「T 母音が接尾辞の母音調和を引き起こしている」と一般化することには利点がある。

ただし、a や ɔ が T 母音である場合には、表 3 に示した語幹末母音との一致率よりも下がっている。また、インフォーマント E では、他に比べて一致率が低い。このように原則に従っていないものを、調査 2 の結果を踏まえて検証する。

### 5.2.3 T 母音との一致率 (調査 2)

調査 2 における T 母音との一致例、およびその数は以下の通りである。

(19) amèrik 《アメリカ》 → amèrik-aas

statistik 《統計》 → statistik-aas

kɔfê 《コーヒー》 → kɔfê-g-ɔɔs ~ kɔfê-n-ɔɔs



表 5 : T 母音と接尾辞母音の一致数 (調査 2)

T 母音	a	ɔ	ê	ɔ	u	i	e	計
接尾辞母音	a	ɔ	e	a	e	e	e	
C 一致	13/15	7/16	2/2	3/3	2/9	0/0	0/0	27/45
D 一致	10/15	9/16	2/2	3/3	5/9	0/0	0/0	29/45
E 一致	4/15	7/16	2/2	3/3	5/9	0/0	0/0	21/45
F 一致	11/15	12/16	2/2	3/3	5/9	0/0	0/0	33/45
G 一致	10/15	8/16	2/2	3/3	6/9	0/0	0/0	29/45

しかし、調査 1 の表 4 と比較すると、T 母音と接尾辞に予測される母音との一致率が、明らかに下がっていることが見て取れる。接尾辞の母音の予測と一致していない例を以下に挙げる。

(20) dollar 《ドル》 → C, D, E, G: dollar-ɔɔs (F: dollar-aas)

kɔbê 《神戸》 → C, F: kɔbê-g-aas ; D, E, G: kɔbê-g-ees (\*kɔbê-g-ɔɔs)

kɔstjum 《スーツ》 → C, D, E, F: kɔstjum-aas ; G: kɔstjum-n-aas (\*kɔstjum-ees)

また、1 人のインフォーマントの中でも、綴り字にした場合と発音した場合とで接尾辞が異なる例が散見された。(全 13 語、各インフォーマントで 5~7 語。)

(21) D: xɔkkêi 《ホッケー》 → 調査 1: xɔkkêi-g-oos ; 調査 2: xɔkkêi-g-ees

G: mɔtɔtsikl 《オートバイ》 → 調査 1: mɔtɔtsikl-n-ɔɔs ; 調査 2: mɔtɔtsikl-aas

このことから、綴り字では T 母音が接尾辞の母音調和を引き起こしていると一般化できたとしても、発音を重視した場合にはそのように簡単には一般化できず、他の要因を考える必要があることがわかる。5.3 では、T 母音で説明できないものに関して、アクセント位置、語の定着度、語末からの距離、デフォルトの母音、母音の聞こえ度、発音の変化、文字の影響という観点から検証する。

### 5.3 T 母音で説明できないもの

#### 5.3.1 アクセント母音との調和

本節では、アクセントを持つ母音と、接尾辞の母音調和との関係を考察する。まず 5.3.1.1 において、原語のアクセント位置とモンゴル語でのアクセント位置がほぼ一致していることを示したうえで、5.3.1.2 において、原語でアクセントを持つ母音

が母音調和を引き起こすか否かを検証する。

### 5.3.1.1 アクセントの一致率

モンゴル語のアクセントは、諸説あるものの、一般的には以下のような固定アクセントを持つと言われている。

- (22) 長母音、二重母音がある場合はそれらのうち最初のものに、ない場合は初頭の母音に、強さアクセントがある。 (小沢 1994: 33-34)

4.1 で述べたように、ロシア語でアクセントを持つ母音は、モンゴル語では長母音として発音される。以上を勘案すると、ロシア語のアクセントはモンゴル語でも保持されるはずである。実際に、今回用いた語彙のアクセントの一致率を表 6 に示す。ロシア語のアクセント位置は、木村ほか (1995) を参照した。

表 6：原語アクセントとモンゴル語アクセントの一致数

原語アクセント インフォーマント	第 1 音節	第 2 音節	第 3 音節	第 4 音節	計
B	39/41	65/72	26/31	4/4	134/148
C	37/41	68/72	27/31	4/4	136/148
D	38/41	66/72	25/31	4/4	133/148
E	41/41	70/72	27/31	4/4	142/148
F	36/41	67/72	24/31	4/4	131/148
G	41/41	67/72	27/31	4/4	139/148

各インフォーマントで、88.5～95.9%という高い割合で原語のアクセント位置とモンゴル語のアクセント位置が一致している。また、148 語のうち 118 語 (79.7%) で、6 人全員が原語のアクセントを保持していた。このことから、概ね原語のアクセントは保持していると言える。

### 5.3.1.2 原語アクセント母音との調和

調査 1 において、T 母音ではなくアクセントを持つ母音が接尾辞の母音を決定している例を示す。(23) は、語末に近い位置にあり、なおかつアクセントを持つ ê, i が、接尾辞の母音調和を引き起こしている例である。

- (23) *ɔfitsêr* 《将校》 → B, D, E: *ɔfitsêr-ees* (A, C, F, G: *ɔfitsêr-ɔɔs*)  
*stratêgi* 《戦略》 → A, C: *stratêg-ees* ; B, E: *stratêgi-es* (D, F, G: *stratêgi-as*)<sup>20</sup>  
*têlêwizor* 《テレビ》 → C, D, G: *têlêwizor-ees* (A, E, F: *têlêwizor-ɔɔs* ; B: *têlêwizr-ɔɔs*)<sup>21</sup>  
*koktêil* 《カクテル》 → B: *koktêili-n-ees* ; E: *koktêili-es*<sup>22</sup>  
 (A, F: *koktêil-ɔɔs* ; C: *koktêili-ɔs* ; D, G: *koktêil<sup>l</sup>-n-ɔɔs*)  
*ewkalipt* 《ユーカリ》 → D: *ewkalipt-ees*  
 (A, B, C, F, G: *ewkalipt-aas* ; E: *ewkalipt-ɔɔs*)<sup>23</sup>  
*akadêmi* 《学士院》 → E: *akadêmi-es* (他 6 名: *akadêmi-as* ~ *akadêm-aas*)  
*artêri* 《協同組合》 → E: *artêri-es* (他 6 名: *artêri-as*)  
*baktêri* 《バクテリア》 → E: *baktêri-es* (他 6 名: *baktêri-as* ~ *baktêr-aas*)  
*kafê* 《カフェ》 → E: *kafê-g-ees* (他 6 名: *kafê(-n)-aas*)  
*manêkên* 《マネキン》 → E: *manêkên-ees* (他 6 名: *manêkên(-n)-aas*)  
*witamín* 《ビタミン》 → E: *witamin-ees* (他 6 名: *witamin-aas*)

これらの例では、T 母音では説明がつかず、「アクセントを持つ母音が接尾辞の母音調和を引き起こしている」と考えられる。特にインフォーマント E では、語末に近い位置にアクセントを持つ母音 *ê, i* がある場合、T 母音ではなく、アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こしていると考えられる例が多くある。

同様の傾向は調査 2 においても観察される。表 7 は、調査 2 において、語末に近い位置にアクセントを持つ母音 *ê, i* がある例である。

表 7: アクセント母音と接尾辞

単語	T 母音	予測接尾辞	E	D	C, F, G
<i>argêntín</i> 《アルゼンチン》	a	aas	ees	aas	aas
<i>baxrêin</i> 《バーレーン》	a	aas	ees	aas	aas
<i>brazíli</i> 《ブラジル》	a	aas	ees	aas	aas
<i>manêkên</i> 《マネキン》	a	aas	ees	aas	aas
<i>koktêil</i> 《カクテル》	ɔ	ɔɔs	ees	ees	ɔɔs/aas
<i>mɔtɔtsíkl</i> 《オートバイ》	ɔ	ɔɔs	ees	ɔɔs	aas
<i>xɔkkêi</i> 《ホッケー》	ɔ	ɔɔs	ees	ees	ɔɔs

<sup>20</sup> 正書法上 3 母音連続は許されないため、接尾辞の母音が短母音表記になる。

<sup>21</sup> 母音字 *ɔ* の消去に関しては、6.1 を参照。

<sup>22</sup> *i* は正書法による。

<sup>23</sup> *ɔ* が現れる理由は不明である。

表 7 から、E は他のインフォーマントに比べ、アクセントを持つ母音と接尾辞の母音が調和している例が多いことがわかる。

しかし、「アクセントを持つ母音が接尾辞の母音調和を引き起こすことがある」のは確かであるが、「アクセントを持つ母音が必ず接尾辞の母音調和を引き起こす」わけではない。その根拠を以下に示す。

まず、調査 1 において、アクセントを持つ母音が引き金となる例よりも、T 母音が接尾辞の母音調和の引き金となる例の方が、圧倒的に多い。(24) に、アクセント母音と接尾辞の母音が一致していない例を示し、表 8 に調査 1 における原語アクセント母音と接尾辞母音の一致数を示す。

(24) ant<sup>é</sup>nn 《アンテナ》 → ant<sup>é</sup>nn-aas (\*ant<sup>é</sup>nn-ees)

maš<sup>i</sup>n 《自動車》 → maš<sup>i</sup>n-aas (\*maš<sup>i</sup>n-ees)

表 8：原語アクセント母音と接尾辞母音の一致数

原語アクセント母音		a	ɔ	ê	ʊ	u	i	e	計
接尾辞母音		a	ɔ	e	a	e	e	e	
A 一致	全語幹	23/29	24/30	15/36	-	-	10/29	0/1	72/125
	例外語幹	23/29	21/25	4/25	-	-	1/11	0/1	49/91
B 一致	全語幹	31/36	29/36	17/36	4/5	3/5	9/29	0/1	93/148
	例外語幹	24/29	21/26	6/25	3/4	1/1	0/11	0/1	55/97
C 一致	全語幹	32/36	30/36	14/36	3/4	4/6	10/29	0/1	93/148
	例外語幹	25/29	21/26	3/25	2/3	2/2	1/11	0/1	54/97
D 一致	全語幹	31/36	30/36	16/36	3/4	4/6	11/29	0/1	95/148
	例外語幹	24/29	21/26	5/25	2/3	2/2	2/11	0/1	56/97
E 一致	全語幹	32/36	31/36	22/36	1/1	4/9	12/29	0/1	102/148
	例外語幹	25/29	21/26	11/25	1/1	1/4	3/11	0/1	62/97
F 一致	全語幹	32/36	30/36	13/36	2/3	2/7	9/29	0/1	88/148
	例外語幹	25/29	22/26	2/25	1/2	0/3	0/11	0/1	50/97
G 一致	全語幹	31/36	29/36	13/36	3/4	3/6	10/29	0/1	89/148
	例外語幹	24/29	20/26	2/25	2/3	1/2	1/11	0/1	50/97

T 母音との一致数を示した表 4 と比較すると、表 8 では一致率が低いことが見て取れる。また (23) からわかるように、アクセント母音と接尾辞の母音を調和させるのは、一部の話者に限られる。一方 (24) では、全話者が T 母音と接尾辞の母音を

調和させている。したがって、基本的には T 母音が接尾辞の母音調和を引き起こしていることがわかる。

調査 2 においても、アクセントを持つ母音 ê, i が全ての語において調和を引き起こしているわけではない。接尾辞の母音に e が選ばれない例がある。

(25) amêrik 《アメリカ》 → amêrik-aas (\*amêrik-ees)

kapitalizm 《資本主義》 → kapitalizm-aas (\*kapitalizm-ees)

以上より、「語末に近いアクセント母音は、話者によっては接尾辞の調和の引き金になる場合がある」と一般化できる。

なお (26) のように、語頭に近いアクセント母音が調和を引き起こしている例もある。

(26) mína 《地雷》 → E: min-ees (A, B, C, D: mina-g-aas ; F: min-aas ; G: mina-n-aas)

átom 《原子》 → C, D, E, F, G: atom-aas (A, B: atom-oos)

dóllar 《ドル》 → A, C, D, E, F: dollar-oos (B, G: dollar-aas)

páspört 《パスポート》 → C, E: pasport(-n)-aas (A, B, D, F, G: pasport(-n)-oos)

これらの語では、語の定着度および母音の弱化と密接な関係がある。語の定着度に関しては 5.3.2、母音の弱化に関しては 6.2 で再考する。

### 5.3.2 語の定着度

接尾辞の決定には、語の定着度やそれに伴う発音の違いが大きな影響を及ぼしている。例えば、モンゴル語に定着していない日本の地名を表す語では、各インフォーマントとも、語末の母音に接尾辞の母音を調和させるケースが目立った。

(27) iwatê 《岩手》 → D, E, F, G: iwatê-g-ees (C: iwatê-g-aas)

mijagi 《宮城》 → D, E, F, G: mijagi-g-ees (C: mijagi-g-aas)

namiê 《浪江》 → D, E, F, G: namiê-g-ees (C: namiê-g-aas)

koo**bb**ê 《神戸》 → D, E, G: koo**bb**ê-g-ees (C, F: koo**bb**ê-g-aas)

totšigi 《栃木》 → D, E, G: totšigi-g-ees (C: totšigi-g-aas ; F: totšigi-g-oos)

matsuê 《松江》 → D, E, F, G: matsüê-g-ees (C: matsüê-g-aas)

jamagutši 《山口》 → D, E, F, G: jamagütši-g-ees (C: jamagütši-g-aas)

これは、調査 1 において、全員にとって定着度の低い bóbslêi 《ボブスレー》とい

う語で、T 母音でない語末の母音 *ei* に接尾辞を調和させた話者が多い、という現象と並行的である。

(28) *bóbslêi* 《ボブスレー》 → A, B, C, E, G: *bóbslêi-g-ees* (D, F: *bóbslêi-g-əs*)

語末のアクセントのない母音は、語やインフォーマントによって扱いが異なる。4.1 で述べたように、ロシア語の強勢のない語末母音は基本的に消去されるが、表記上母音が残されている語も散見される。そのような語では、おそらく語の定着度によって、語末の母音が発音上消去されるか否かが決定される。モンゴル語の本来語には基本的に、短母音で終わる語はない。定着度の高い語は、本来語と同じような発音、つまり語末の短母音が消去された形で発音されると考えられる。そして、語末の短母音が消去された場合には、その痕跡が接尾辞に反映されるか否かによって結果が異なる。

(29) *birma* 《ビルマ》 → C: *birm-aas* ; D: *birma-g-aas* ; E, F, G: *birm-ees*

*júbka* 《スカート》 → C: *jubka-n-aas* ~ *jubk-n-ees* ; D: *jubk-n-ees* ; E: *jubk-ees* ;

F: *jubka-n-aas* ; G: *jubk-n-aas*

*piwə* 《ビール》 → C, D, E: *piw-n-ees* ; F, G: *piw-n-əs*

アクセントを持つ *i* が接尾辞の調和を引き起しているように見える例として (26) に挙げた *mína* 《地雷》の例も、語末の短母音 *a* が消去されたために、接尾辞の母音に *e* が選ばれていると考えられる。

(30) *mína* 《地雷》 → E: *min-ees* (親密度は 1 = 「その語をよく知っている」)

F, G: *mina(-n)-aas* (親密度は 1)

A, B, C, D: *mina-g-aas* (親密度は 2 = 「知っているが、あまり使わない」)

一方、定着度が高いと思われる語は、アクセントのない母音が弱化した上で、それより前の母音が接尾辞の母音を決定している。これは、外来語における母音の弱化と考えることができる (6.2 参照)。

- (31) *átom* 《原子》 → C, D, E, F, G: *atom-aas* (発音上、*o* は弱化する)  
*dóllar* 《ドル》 → C, D, E: *dollar-oos* (発音上、*a* は弱化する)  
*pásport* 《パスポート》 → C, E: *pasport-aas* (発音上、*o* は弱化する)  
*têlêwizor* 《テレビ》 → C, D, F, G: *têlêwizor-ees*  
 (発音上、*o* は弱化または消失する)

以上の結果から、語の定着度が接尾辞の選択に影響を与えていることがわかる。

表 9：母音調和と語の定着度との関係

定着度	母音調和を引き起こす母音	条件
低	語末の母音	-
中	T 母音	-
	アクセントを持つ <i>i, ê, e</i>	語末に近い場合
高	アクセントを持つ母音	後続母音の弱化

### 5.3.3 語末からの距離

インフォーマント E で、語末から数えて 2 音節目までが透明な母音 (*ê, i*) である場合、その前に位置する母音が男性母音であったとしても、接尾辞の母音として *e* が選ばれる例が見られた。これは、語末からの距離が接尾辞の選択に影響していることを意味する。

- (32) *márkêting* 《マーケティング》 → E: *markêting-ees* (他 4 名: *markêting-aas*)

また、表 7 に挙げた *argêntín* 《アルゼンチン》、*brazili* 《ブラジル》、*manêkên* 《マネキン》も、T 母音が語末から 2 音節以上離れているため、接尾辞の母音として *e* が選ばれると考えることもできる。

しかし、これも全ての場合に適用できるわけではない。

- (33) *statístik* 《統計》 → *statistik-aas* (\**statistik-ees*)

語末から 2 音節 *i* が続くにもかかわらず、全員で接尾辞の母音には *a* が選ばれている。

## 5.3.4 デフォルトの母音

語末から T 母音までが長い語や、日本語などあまり聞き慣れない語の場合に、接尾辞に最も頻繁に現れる母音は a である。このことから、a がデフォルトの母音として機能していると考えられる。特にインフォーマント C では、(27) からわかるように日本語の地名に -aas がよく用いられた。また、他のインフォーマント、他の語でも同様の現象が見られた。

(34) muzêi 《博物館》 → C: muzêi-g-aas ~ muzêi-g-ees

ɔtsu 《大津》 → D: ɔtsu-g-aas

kɔktêil<sup>l</sup> 《カクテル》 → F, G: kɔktêil<sup>l</sup> -n-aas

mɔtɔtsikl 《オートバイ》 → G: mɔtɔtsikl-aas

xɔkkaidɔɔ 《北海道》 → G: xɔkkaidɔɔ-g-aas

## 5.3.5 母音の聞こえ度

日本語の地名に見られる母音 u は、母音調和に関して透明である場合がある。これは、母音 u の聞こえ度が低いためであると考えられる。また、本来 u は円唇性の調和をブロックするはずであるが、円唇性の調和を引き起こしている例がある<sup>24</sup>。

(35) takamatsu 《高松》 → D, F, G: takamatsu-g-aas (C, E: takamatsu-g-ɔɔs)

ɔtsu 《大津》 → C, E: ɔtsu-g-ɔɔs (D: ɔtsu-g-aas ; F, G: ɔtsu-g-ees)

## 5.3.6 発音の変化

kinɔ 《映画》という語は、全員にとって親密度が 1、つまりモンゴル語に定着した外来語と言えるが、人によって発音が異なる。一部の話者では[k<sup>l</sup>ano:] (kjanoo) という発音になる。

モンゴル語には歴史的に、第 1 音節の i が後続母音の影響で a または ja となる、「i の折れ」と呼ばれる現象があったが、一部の話者は、これと同様の音変化を外来語にも適用している。また、円唇性の母音調和に従って、第 2 音節の母音が ɔɔ に変化している。この語では発音が変わっているか否かによって、接尾辞に違いがある。

(36) <kinɔ> 《映画》 → C: kjanoo-n-aas ; D: kinɔ-g-ɔɔs ; E ~ G: kinɔ-n-ɔɔs

<sup>24</sup> ただし日本語の/u/に関しては、モンゴル語で/ɔ/として導入される場合もあり、個人間で音素の認識が異なっている可能性もある。この問題に関しては、今後の課題としたい。



同様に、*sotsialist*《社会主義者》、*sotsiolizm*《社会主義》という語も、それぞれ *sotsiolist*、*sotsializm* と発音する話者がおり、その発音の変化に従って、接尾辞の母音が決定されている。

- (37) *sotsialist* 《社会主義者》 → F: *sotsiolist-ɔɔs* (他 6 名: *sotsialist-aas*)  
*sotsiolizm* 《社会主義》 → G: *sotsializm-aas* (他 6 名: *sotsiolizm-ɔɔs*)

### 5.3.7 文字の影響

キリル文字 <ю> (<ju> = /jʊ/, /ju/) が含まれる語は、大きく揺れがあった。

- (38) *kompjutêr* 《コンピュータ》 → 調査 1: *kompjutêr-ɔɔs* ~ *kompjutêr-ees*  
 調査 2: *kompjutêr-ɔɔs* ~ *kompjutêr-aas*  
*kostjum* 《スーツ》 → 調査 1: *kostjum-aas* ~ *kostjum-ɔɔs*  
 調査 2: *kostjum-aas*

<ju> を持つ語は綴り字でも発音でも、調和を引き起こさず無視されることがあり、その前の母音が調和の引き金となるか、デフォルトの母音を要求する傾向にあることがわかる。綴り字では <ю> が純粋な母音文字ではないこと、発音では /u/ の聞こえ度が低いことが影響していると考えられる。

また、キリル文字 <y> (<ɥ>) は外来語において /ʊ/ と /u/ の両方を表し、通常は発音に基づいて接尾辞が決定されるが、文字の影響が見られるケースがあった。

- (39) D 《ウイルス》 調査 1: <wiruɥ> → <wiruɥaas> ; 調査 2: wiruɥ → wiruɥ-ees  
 F 《見学》 調査 1: <ekskɥrs> → <ekskɥrsaas> ; 発音 *ekskɥrs-aas* (\**ekskɥrs-ees*)

インフォーマント D の《ウイルス》の例では、綴り字を用いた調査 1 と発音のみの調査 2 とで結果が異なった。また、インフォーマント F は綴り字に忠実に接尾辞の付与を行い、文字 <ɥ> が T 母音となる語には必ず接尾辞-aas を選んだ。このことから、2通りの発音がある文字 <ɥ> では、綴り字の影響が見られることがわかる。

## 5.4 接尾辞の母音調和を引き起こす要因：まとめ

以上 5 節では、接尾辞の母音調和に影響を与える要因について検証した。その結果、モンゴル語の接尾辞の母音調和は、T 母音が引き起こすことを基本としながらも、他にも以下のような要因が関わっていることが明らかとなった。

原語アクセント／語の定着度／語末からの距離／デフォルトの母音／母音の聞こえ度／発音の変化／文字の影響

これらの要因はT母音も含め、どれも決定的ではない。これらの要因は、ある一定の条件を満たせばどれも働く可能性を持っており、いずれの要因が作用するか予測できない点で、「本質的なランキングのない規則」と言える。また、インフォーマントEではアクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こす例が多いのに対し、インフォーマントCではデフォルトの母音が多く現れるなど、個人間で重要視する規則が異なることもわかる。

## 6 母音の弱化の実態

本節では、母音の弱化について考察する。6.1 では表記に見える母音の弱化、6.2 では母音の弱化と母音調和との関連性について述べる。

### 6.1 表記に見える母音の弱化

綴り字の面からは、インフォーマントBで9語、Dで8語、Eで3語、Gで2語において、母音の弱化に起因すると見られる綴り字の変化が観察された。

- (40) *akkumoljator* 《蓄電池》 → B: <akkumoljatrɔɔs>  
*arxitektor* 《建築家》 → B: <arxitektɔɔs>  
*buiwɔl* 《水牛》 → B: <buiwɔɔs>  
*gêktar* 《ヘクタール》 → B: <gêktraas>  
*têlêwizor* 《テレビ》 → B: <têlêwizɔɔs>  
*lêktor* 《講師》 → D: <lêktrɔɔs>  
*rêktor* 《学長》 → D: <rêktrɔɔs>  
*fêodal* 《封建貴族》 → B, D: <fêodlaas>  
*puuder* 《おしろい》 → B: <puudrnees> D: <puudrees>  
*rêdaktor* 《編集者》 → B: <rêdaktraas> D: <rêdaktrɔɔs>  
*sɔɔsɔg* 《おしゃぶり》 → E: <sɔɔsgɔɔs>  
*saaxar* 《砂糖》 → D, E: <saaxraas>  
*mɔɔrɔg* 《霊安室》 → B, D, G: <mɔɔrgɔɔs>  
*zamaasag* 《塗布》 → D, E, G: <zamaasgaas>

これらの例では、アクセントのない母音が消去されていることから、母音の弱化が

起こっていることが綴り字から見て取れる。この母音の消去の仕方は (41) に示す正書法に合致し、(42) に示すように、本来語では頻繁かつ規則的に起こるものである。

(41) m, n, g, l, b, w, r の 7 子音字は、前後いずれか明瞭に聞かれる所に、必ず母音を伴って書かれる。(また) 前か、後のどちらかに母音を伴って書かれればよいのであって、その前と後の両方に母音を持つ必要はない。(小沢 1994: 27-28)

(42) <uxer> 《牛》 → <uxrees>

puuder 《おしろい》、soosog 《おしゃぶり》、saaxar 《砂糖》、moorog 《霊安室》、zamaasag 《塗布》の 5 つは、音素の配列がモンゴル語に適応しているため、外来語だという意識がない可能性もある。しかし、それ以外の 9 語は、外来語にしか用いられない子音の存在や母音の配列から、その語を知らなくても外来語だと認識できる。つまり、少なくともインフォーマント B, D は、外来語だと認識しながら母音の弱化を起こしていると言える。

## 6.2 母音調和との関連性

複数のインフォーマントのいくつかのデータから、母音調和と母音の弱化との関連性が示唆される。

まず、5.3.2 で述べたように、定着度が高いと思われる語は、アクセントのない母音が弱化した上で、アクセントを持つ母音が接尾辞の調和を引き起こす傾向にある。

(43) (=31 再掲) átom 《原子》 → C, D, E, F, G: atóm-aas (発音上、o は弱化する)

dóllar 《ドル》 → C, D, E: dollar-ɔɔs (発音上、a は弱化する)

páspört 《パスポート》 → C, E: paspört-aas (発音上、o は弱化する)

têlêwízor 《テレビ》 → C, D, F, G: têtêwízor-ees

(発音上、o は弱化または消失する)

同様の結果が、調査 1 においても観察された。また、表記と発音が異なる結果を示す語もしばしば見られた。

- (44) **akkomóljátor** 《蓄電池》 → F : akkomóljator-aas  
 (A, C, D, E, G: akkomóljator-ᠠᠶᠢ ; B: akkomóljatr-ᠠᠶᠢ)  
 ※B: akkomóljatr-aas も可と回答
- átóm** 《原子》 → C, D, E, F, G: atóm-aas (A, B: atóm-ᠠᠶᠢ)  
 ※ただし E, F, G: 発音は atóm-ᠠᠶᠢ に近い
- dóllar** 《ドル》 → A, C, D, E, F: dollar-ᠠᠶᠢ (B, G: dollar-aas)  
 ※D: aas ~ ᠠᠶᠢ で迷いあり F: 発音は-aas であると明言
- fěodal**<sup>25</sup> 《封建貴族》 → C: fěodal-ᠠᠶᠢ (A, E, F, G: fěodal-aas ; B, D: fěodl-aas)  
 ※E, F, G: fěodl-aas と発音
- fókus** 《焦点》 → C, D, E: fókus-ᠠᠶᠢ (A, B, F, G: fókus(-n)-aas)  
 ※B: fókus-n-aas ; C, D, E: fókus-ᠠᠶᠢ ; F: fókus-aas ; G: fókus-ᠠᠶᠢ と発音
- kónsul** 《領事》 → E, G: kónsul-ᠠᠶᠢ (A, B, C, D, F: kónsul-aas)  
 ※G: kónsl-ᠠᠶᠢ と発音
- páspört** 《パスポート》 → C, E: paspört(-n)-aas (A, B, D, F, G: paspört(-n)-ᠠᠶᠢ)
- rédáktor** 《編集者》 → B: réda~~tr~~-aas ; C: réda~~tr~~-aas  
 (A, E, F, G: réda~~tr~~-ᠠᠶᠢ ; D: réda~~tr~~-ᠠᠶᠢ)
- têlêwízor** 《テレビ》 → C, D, G: têlêwízor-ees (A, E, F: têlêwízor-ᠠᠶᠢ ; B: têlêwizr-ᠠᠶᠢ)  
 ※D, G: têlêwizr-ees と発音 F: têlêwizr-ᠠᠶᠢ と発音  
 E: 普通口語では têlêwizr-ees であると明言
- těxnikum** 《職業技術学校》 → E: těxnikum-ees (A, D, F, G: těxnikum-aas)

以上の 10 語のうち 4 語 (akkomóljátor 《蓄電池》、fěodal 《封建貴族》)、rédáktor 《編集者》、têlêwízor 《テレビ》) は、インフォーマント B または D で表記上母音が消去される語である。このことから、母音の弱化が起こった結果、母音調和の引き金となる母音が前方にある母音となる、つまり母音調和と母音の弱化との間に関連性があることがわかる。

また (45) は、前方にある母音と調和しているわけではないが、インフォーマント D において、表記上母音が消去される語、つまり母音の弱化が起こり得る語であることは注目に値する。

- (45) **léktor** 《講師》 → B: léktor-aas (A, C, E, F, G: léktor-ᠠᠶᠢ ; D: léktr-ᠠᠶᠢ)

<sup>25</sup> 原語 (ロシア語) では最終音節にアクセントがあるが、7名全員が fěodal と発音したので、この語に関してはアクセント位置がモンゴル語で変更されているとみなす。

インフォーマント B では、T 母音の *ɔ* が弱化したことで、デフォルトの母音が選ばれていると考えられる。この例からも、母音調和と母音の弱化との関連性が示唆される。

6 節では、外来語においても母音の弱化が起こり得ること、さらに母音の弱化と母音調和に関連性があることを示した。ただし、このような母音の弱化は、主に[閉鎖音・摩擦音]と[流音・鼻音]の間という限られた音素配列においてのみ起こっており、いつでも母音の弱化が起こるわけではない。また、上記の環境で必ず母音の弱化が起こるというものでもない。よって、外来語における母音の弱化は必ずしも体系的な規則ではなく、語彙的なものである。

## 7 まとめ

調査 1 と調査 2 の結果を基に、接尾辞の母音調和について整理する。

まずは調査 1 の結果から、原則として「*i, ê, e* を除いて語末に最も近い母音 (T 母音) が接尾辞の調和を引き起こす」と一般化できる。

次に調査 2 の結果から、上記の一般化と競合する複数の規則が存在することがわかる。

- (46) a. 定着度の高い語は、アクセントのない母音が弱化した上で、語頭に近い位置の母音が調和を引き起こす。
- b. 語末に近いアクセント母音は、中性母音でも調和を引き起こす。
- c. 語末から T 母音までの距離が長い場合、中性母音でも調和を引き起こす。
- d. 定着度の低い語では、中性母音でも調和を引き起こす。
- e. 定着度の低い語や語末から T 母音までの距離が長い語では、デフォルトの母音 *a* が選ばれる。
- f. 聞こえ度の低い母音 *u* は無視される。

これらの規則に本質的なランキングはなく、語や話者によって選ばれる規則が異なる。同じ環境でも複数の規則があることによって、結果に差が生じる。また、語の定着度によって、接尾辞の母音調和に違いがあることもわかる。

Nevins (2010) によると、(接尾辞の) 母音調和は理論的に、素性が未指定の母音 (recipient) が素性を受け取るために探索 (search) していき、素性を持つ要素 (donor) に行き着いたところで素性を受け取り (copy)、母音が決定される。search の方法や donor は言語ごとに異なっており、言語内でもバリエーションがある。

モンゴル語では、接尾辞の母音を決定するために、語末から語頭に向かって search

する。アクセントを持つ ê や弱化した母音など、donor の候補にはなるが決定的ではない母音に到達した際、その候補を donor として採用するかが判断される。採用されれば素性が copy され、採用されなければさらに遡って donor の候補を探す、というプロセスが考えられる。

dollár-VVs : á を donor とするか → yes : dollar-aas / no : dollar-oos

←  
manêkên-VVs : ê を donor とするか → yes : manêkên-ees / no : manêkên-aas

以上を全て考慮に入れた時の分析結果は、付録 2 に示す。

また (46a) は、母音調和と母音の弱化との間に関連性があることを示している。体系的ではないものの、外来語でも語によっては母音の弱化が起こること、母音調和と母音の弱化には相互関係があることが示された。

## 付録1

### キリル文字転写

キリル	а	б	в	г	д	е	ё	ж	з	и	й	к	л	м	н	о	ө	п
転写	a	b	w	g	d	je jo ê	jɔ	ǰ	z	i	i	k	l	m	n	ɔ	o	p
キリル	р	с	т	у	ү	ф	х	ц	ч	ш	щ	ъ	ы	ь	э	ю	я	
転写	r	s	t	u	u	f	x	ts	tʃ	ʃ	ʃtʃ	-	ii	j	e	jɔ ju	ja	

## 付録2

単語：調査語彙（アクセントは基本的に原語でのアクセント位置を示し、インフォーマント全員でアクセント位置が変わっているもののみ、モンゴル語でのアクセント位置を示している。話者によってアクセントが異なるものは、アクセントの変化が接尾辞の決定に影響を及ぼしている場合にのみ示した。また、日本語のピッチアクセントは示していない。）

A～G（C～G）：インフォーマント

a, ɔ, e：当該語彙に対する接尾辞の母音として選ばれた母音

網掛け：T母音と接尾辞の母音が調和していない例

- \*1：アクセントのない母音が弱化した上で、語頭に近い位置の母音が調和を引き起こしている例。
- \*2：語末に近い、アクセントを持つ中性母音が調和を引き起こしている例。
- \*3：語末からT母音までの距離が長いため、中性母音が調和を引き起こしている例。
- \*4：語の定着度が低いため、中性母音が調和を引き起こしている例。
- \*5：語の定着度が低い、語末からT母音までの距離が長い、文字<jɔ>が現れるなどの理由で、デフォルトの母音aが選ばれている例。
- \*6：聞こえ度の低い母音/uが無視されている例。
- \*7：複合語とみなされている例。
- \*8：モンゴル語内での発音の変化など、発音を考慮に入れば説明できる例。
- \*9：綴り字の影響が見られる例。
- \*10：語末の短母音の削除が影響している例。
- \*?：説明がつかない例。

## 調査 1

単語	意味	A	B	C	D	E	F	G
akadémi	学士院	a	a	a	a	e*2,3	a	a
akkumuljátor	蓄電池	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	a*1	ɔ
al'bóm	アルバム	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
alóe	アロエ	-	ɔ	ɔ	ɔ	e*?	ɔ	ɔ
amérik	アメリカ	a	a	a	a	a	a	a
ankét	アンケート	a	a	a	a	a	a	a
anténn	アンテナ	a	a	a	a	a	a	a
artéri	協同組合	a	a	a	a	e*2,3	a	a
arxitéktor	建築家	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
arxíw	公文書	a	a	a	a	a	a	a
assambléi	総会	a	e*2	a	e*2	a	a	a
átom	原子	ɔ	ɔ	a*1	a*1	a*1	a*1	a*1
awtóbús	バス	a	a	a	a	a	a	a
azót	窒素	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bagáj	手荷物	-	a	a	a	a	a	a
baktéri	バクテリア	a	a	a	a	e*2,3	a	a
barón	男爵	ɔ	ɔ	a*5	a*5	ɔ	a*5	ɔ
béisból	野球	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bênzín	ガソリン	e	e	e	e	e	e	e
bêtón	コンクリート	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bidón	缶	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bifstéks	ビフテキ	e	e	e	e	e	e	e
bilét	切符	e	e	e	e	e	e	e
bíznesmên	ビジネスマン	e	e	e	e	e	e	e
bóbslêi (B:bóbslêi)	ボブスレー	e*4	e*2,4	e*4	ɔ	e*4	ɔ	e*4
bôl'nítš	病院	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bóiwól	水牛	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
bóltška	ロールパン	a	a	a	a	a	a	a
dékán	学部長	a	a	a	a	a	a	a
dél'fín	イルカ	e	e	e	e	e	e	e
díplomát	外交官	a	a	a	a	a	a	a
dóllár	ドル	ɔ*1	a	ɔ*1	ɔ*1	ɔ*1	ɔ*1	a



モンゴル語の母音調和と母音の弱化—外来語を用いた分析—

単語	意味	A	B	C	D	E	F	G
dónor	ドナー	-	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
êgípêt	エジプト	e	e	e	e	e	e	e
ekológí	生態学	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
ekskó/úrs	見学	e	a	e	e	e	a*9	e
ekspêdíts	探検	e	e	e	e	e	e	e
éksport	輸出	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
elêktrón	電子	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
elémént	構成分子	e	e	e	e	e	e	e
elít	エリート	e	e	e	e	e	e	e
enérǵí	エネルギー	e	e	e	e	e	e	e
ewkalípt	ユーカリ	a	a	a	e*2	ɔ*?	a	a
êwráz	ユーラシア	a	a	a	a	a	a	a
êwréi	ユダヤ人	e	e	e	e	e	e	e
êwróp	ヨーロッパ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
fanér	ベニヤ板	a	a	a	a	a	a	a
féodal	封建貴族	a	a	ɔ*1	a	a	a	a
fêstiwál <sup>l</sup>	フェスティバル	a	a	a	a	a	a	a
fókus	焦点	a	a	ɔ*1	ɔ*1	ɔ*1	a	a
gêktár	ヘクタール	a	a	a	a	a	a	a
gênêrál	将軍	a	a	a	a	a	a	a
gêróin	ヒロイン	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
gídra	ヒドラ	a	a	a	a	a	a	a
granát	手榴弾	-	a	a	a	a	a	a
ímport	輸入	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
intêrnét	インターネット	e	e	e	e	e	e	e
júbka	スカート	a	a	a	e*10	e*10	a	a
kábêl <sup>l</sup>	ケーブル	a	a	a	a	a	a	a
kafé	カフェ	a	a	a	a	e*2	a	a
kámêr	部屋	a	a	a	a	a	a	a
kazáx	カザフ	-	a	a	a	a	a	a
kêrosín	灯油	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	a*5	ɔ	ɔ
kiló (D: kilo)	キロ	ɔ	ɔ	ɔ	e*10	ɔ	ɔ	ɔ
kilómêtr	キロメートル	e*7	ɔ	ɔ	e*7	ɔ	ɔ	ɔ

単語	意味	A	B	C	D	E	F	G
kinó	映画	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kófè	コーヒー	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kòktéil <sup>l</sup>	カクテル	ɔ	e*2	ɔ	ɔ	e*2	ɔ	ɔ
kóla	コーラ	a	a	a	a	a	a	a
kólóni	植民地	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kómíss	委員会	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kømmóna	コンミュン	a	a	a	a	ɔ*?	a	a
kompáni	会社	a	a	a	a	a	a	a
kompjútér	コンピュータ	ɔ*6,9	e	e	e	ɔ*6,9	ɔ*6,9	ɔ*6,9
kónsul	領事	a	a	a	a	ɔ*1	a	ɔ*1
kòntsért	協奏曲	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kòstjúm	スーツ	a*5	a*5	ɔ*6,9	a*5	ɔ*6,9	ɔ*6,9	a*5
krédít	クレジット	e	e	e	e	e	e	e
lágèr, lágèr <sup>l</sup>	兵営	a	a	a	a	a	a	a
léktór	講師	ɔ	a*5	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
lógik	論理学	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
lózozon	スローガン	-	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
majár	マジャー人	-	a	a	a	a	a	a
manékén	マネキン	a	a	a	a	e*2,3	a	a
marafón	マラソン	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
márganèts	マンガン	a	a	a	a	a	a	a
márkêting	マーケティング	a	a	a	e*3	a	a	a
mašín	自動車	a	a	a	a	a	a	a
master	名人	a	a	a	a	a	a	a
médál <sup>l</sup>	メダル	a	a	a	a	a	a	a
méssenjer	メッセンジャー	e	e	e	e	e	e	e
mêtró	メトロ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
mína	地雷	a	a	a	a	e*10	a	a
minút	分	a	a	a	a	a	a	a
móorog	霊安室	-	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
mótór	モーター	-	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
mòtòtsíkl	オートバイ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
muzéi	博物館	e	e	e	e	e	e	e

モンゴル語の母音調和と母音の弱化—外来語を用いた分析—

単語	意味	A	B	C	D	E	F	G
nómēr	番号	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
ɔfítsēr	将校	ɔ	e*2,3	ɔ	e*2,3	e*2,3	ɔ	ɔ
pal'tó	外套	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
páspört	パスポート	ɔ	ɔ	a*1	ɔ	a*1	ɔ	ɔ
pênitsillín	ペニシリン	e	e	e	e	e	e	e
pêtsén <sup>1</sup>	ビスケット	e	e	e	e	e	e	e
pingwín	ペンギン	e	e	e	e	e	e	e
pomidór	トマト	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
prókorór	検事	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
púuder	おしろい	-	e	e	e	e	e	e
púušig	大砲	-	e	e	e	e	e	e
rádio	ラジオ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
rêdáktr	編集者	ɔ	a*1	a*1	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
rêfêrát	レポート	a	a	a	a	a	a	a
rêktør	学長	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
rêmén	ベルト (コンベア)	e	e	e	e	e	e	e
rêstorán	レストラン	a	a	a	a	a	a	a
rêzín	ゴム	e	e	e	e	e	e	e
pomán	長編小説	a	a	a	a	a	a	a
sáaxar	砂糖	-	a	a	a	a	a	a
salát	サラダ	-	a	a	a	a	a	a
salmonér	サルモネラ	a*5	ɔ	a*5	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
sámbo	サンボ	ɔ	ɔ	ɔ	a*10	ɔ	ɔ	ɔ
sêminár	ゼミナール	a	a	a	a	a	a	a
sênát	上院	a	a	a	a	a	a	a
sistêm	システム	e	e	e	e	e	e	e
sonát	ソナタ	a	a	a	a	a	a	a
sóosog	おしゃぶり	-	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
sotsialíst	社会主義者	a	a	a	a	a	ɔ*8	a
sotsiolism	社会主義	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	a*8
stratégi	戦略	e*2,3	e*2,3	e*2,3	a	e*2,3	a	a
súpêrmarkêt	スーパーマーケット	a	a	a	a	a	a	a
taksí	タクシー	a	a	a	a	a	a	a

単語	意味	A	B	C	D	E	F	G
téléfón	電話	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
téléwízor	テレビ	ɔ	ɔ	e*1	e*1	ɔ	ɔ	e*1
téxníkom	職業技術学校	a	a	a	a	e*1	a	a
títán	チタン	a	a	a	a	a	a	a
tókar <sup>i</sup>	旋盤工	a	a	a	a	a	a	a
totšíl	砥石	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
wagón	客車	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	a*?
waktsín	ワクチン	a	a	a	a	a	a	a
wébsait	ウェブサイト	a	a	a	a	a	a	a
wéna	静脈	a	a	a	a	a	a	a
widéó	ビデオ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
wíro/us	ウイルス	e	a*9	a*9	a*9	e	a*9	a
witamín	ビタミン	a	a	a	a	e*2	a	a
xókkéi	ホッケー	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
xristós	キリスト	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
zamáasag	塗布 パテ	a	a	a	a	a	a	a
zootéxník	畜産学	e*7	e*7	e*7	e*7	e*7	e*7	e*7

## 調査 2

単語	意味	C	D	E	F	G
amérik	アメリカ	a	a	a	a	a
argéntín	アルゼンチン	a	a	e*2,3	a	a
awtóbús	バス	a	a	a	a	a
baxréin	バーレーン	a	a	e*2	a	a
bírma	ビルマ	a	a	e*10	e*10	e*10
brazíli	ブラジル	a	a	e*2,3	a	a
burnéi	ブルネイ	e	e	e	e	e
dóllar	ドル	ɔ*1	ɔ*1	ɔ*1	a	ɔ~a*1
dóminík	ドミニカ	a	a	a	a	a
égípet	エジプト	e	e	e	e	e
éksport	輸出	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
éximé	愛媛	e	e	e	e	e

モンゴル語の母音調和と母音の弱化—外来語を用いた分析—

単語	意味	C	D	E	F	G
ímpɔrt	輸入	a*?	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
iwatê	岩手	a(*5)	e*4	e*4	e*4	e*4
jamagutši	山口	a*5,6	e	e	e	e
júbka	スカート	a~e*10	e*10	e*10	a	a
kapitalízm	資本主義	a	a	a	a	a
kinó	映画	a*8	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kɔɔbê	神戸	a*5	e*4	e*4	a*5	e*4
kófê	コーヒー	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
kɔktéiɭ	カクテル	ɔ	e*2	e*2	a*5	a*5
kóla	コーラ	a	a	a	a	a
kɔmpjútêr	コンピュータ	ɔ*6	a*5,9	a*5,9	a*5,9	a*5,9
kɔstjúm	スーツ	a*5,9	a*5,9	a*5,9	a*5,9	a*5,9
manêkên	マネキン	a	a	e*2,3	a	a
marketing	マーケティング	a	a	e*3	a	a
matsuê	松江	a*5,6	e	e	e	e
mijagi	宮城	a(*5)	e*4	e*4	e*4	e*4
minót	分	a	a	a	a	a
mɔtɔtsíkl	オートバイ	ɔ	ɔ	e*2	ɔ	a*5
muzéi	博物館	a~e*9	e	e	e	e
namiê	浪江	a(*5)	e*4	e*4	e*4	e*4
ɔɔtsu	大津	ɔ*6	a*5	ɔ*6	e	e
pásport	パスポート	a*1	ɔ	a*1	ɔ	ɔ
píwɔ	ビール	e*10	e*10	e*10	ɔ	ɔ
singapór	シンガポール	a	a	a~e?	a	a
sɔtsiálízm	社会主義	a*8	ɔ	e~a*8	ɔ	a*8
statístik	統計	a	a	a	a	a
takamatsu	高松	ɔ*?	a*5,6	a~ɔ*?	a*5,6	a*5,6
têlêfɔn	電話	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ
têlêwízɔr	テレビ	e*1	e*1	ɔ	e*1	e*1
tɔtšigi	栃木	a*5	e*4	e*4	ɔ	e*4
wírɔ/us	ウイルス	a*9	e	e	a*9	e
xɔkkaidɔɔ	北海道	ɔ	ɔ	ɔ	ɔ	a*5
xɔkkéi	ホッケー	ɔ	e*2	e*2	ɔ	ɔ

参考文献

- 小沢重男 (1994) 『増補 モンゴル語四週間』 大学書林
- 角道正佳 (1974) 「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会会報』 第 5 号 pp. 29-36.
- 木村彰一, 佐藤純一, 森安達也, 栗原成郎, 中村喜和, 桑野隆, 松井茂雄編 (1995) 『ロシア語辞典』 博友社
- 斎藤純男 (1984) 「現代モンゴル語の弱化母音と母音調和」『Lexicon』 第 13 号 pp. 57-71.
- 佐藤純一 (1992) 「ロシア語」『言語学大辞典 第 4 卷 世界言語編 (下-2)』 pp. 1032-1044, 三省堂
- 塩谷茂樹・E. プレブジャブ (2001) 『初級モンゴル語』 大学書林
- 城生佰太郎 (2005) 『モンゴル語母音調和の研究—実験音声学的接近—』 勉誠出版
- 中嶋善輝 (2009) 『モンゴル語・日本語小事典』 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
- 橋本邦彦 (1982) 「韻律理論による母音調和の分析」『室蘭研究報告』 文化編 第 10 巻第 4 号 pp. 581-611.
- 林徹 (1989) 「トルコ語」『言語学大辞典 第 2 巻 世界言語編 (中)』 pp. 1383-1395, 三省堂
- 松村一登 (1992) 「フィンランド語」『言語学大辞典 第 3 巻 世界言語編 (下-1)』 pp. 672-688, 三省堂
- Goldsmith, John (1985) 'Vowel Harmony in Khalkha Mongolian, Yaka, Finnish and Hungarian', *Phonology Yearbook* 2, pp. 253-275.
- Hattori, Shirô (1982) 'Vowel Harmonies of the Altaic Languages, Korean, and Japanese', *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hung.* Tomus XXXVI (1-3), pp. 207-214.
- van der Hulst, Harry and Norval Smith (1987) 'Vowel harmony in Khalkha and Buriat (East Mongolian)', In F. Beukema and P. Coopmans (eds.), *Linguistics in the Netherlands*. pp. 81-91.
- Kirchner, Robert (1993) 'Turkish Vowel Harmony and Disharmony: An Optimality Theoretic Account', Paper presented at *Rutgers Optimality Workshop I (ROE-I)*.
- Ko, Seongyeon (2011) 'Vowel Contrast and Vowel Harmony Shift in the Mongolic Languages', *Language Research* 47.1, pp. 23-43.
- Kontra, Miklós and Catherine O. Ringen (1986) 'Vowel Harmony: The Evidence from Loanwords', *Ural-Altaic Yearbook*, pp. 1-14.
- Nevins, Andrew (2010) *Locality in Vowel Harmony* (Linguistic Inquiry Monographs 55), MIT Press.

- Ringen, Catherine O. (1988) 'Transparency in Hungarian Vowel Harmony', *Phonology* 5, pp. 327-342.
- Ringen, Catherine O. and Orvokki Heinämäki (1999) 'Variation in Finnish Vowel Harmony: An OT Account', *Natural Language and Linguistic Theory* 17, pp. 303-337.
- Sasa, Tomomasa (2011) *Treatment of Vowel Harmony in Optimality Theory*, Proquest, Umi Dissertation Publishing.
- Steriade, Donca (1979) 'Vowel Harmony in Khalkha Mongolian', *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol I, pp. 25-42.
- Street, John C. (1963) *Khalkha Structure*, Uralic and Altaic series 13, Indiana University.
- Svantesson, Jan-Olof (1985) 'Vowel Harmony Shift in Mongolian', *Lingua* 67, pp. 283-327.
- Svantesson, Jan-Olof, Anna Tsendina, Anastasia Karlsson, and Vivan Franzén (2005) *The Phonology of Mongolian*, Oxford University Press.
- Välismaa-Blum, Riitta (1999) 'A Feature Geometric Description of Finnish Vowel Harmony Covering both Loans and Native Words', *Lingua* 108, pp. 247-268.

## Vowel Harmony and Vowel Reduction in Mongolian: An Analysis Using Loanwords

Naoki UETA

### Abstract

In this paper I discuss the rules of vowel harmony in suffixes and vowel reduction in Khalkha Mongolian revealed by two surveys, in which native speakers were asked to add certain suffixes to loanwords.

The two surveys show that vowel harmony in suffixes is affected by phonological or sociolinguistic factors such as the location of accent or whether the loanword is well-established or not. More specifically, although word-final vowels other than *i*, *ê* and *e* trigger vowel harmony in suffixes as a general rule, there are some other rules in competition with this rule that produce different outcomes. These are as follows:

- 1) When a suffix is added to a common loanword, unaccented vowels are sometimes reduced and a vowel nearer to word-initial position determines the class of vowel harmony of the suffix.
- 2) Vowels in suffixes sometimes harmonize with word-final accented *i*, *ê* and *e*, even though these are normally neutral vowels with respect to vowel harmony.
- 3) Vowels in suffixes sometimes harmonize with neutral vowels when more than one neutral vowel appears at the right edge of a word.
- 4) When a suffix is added to an uncommon loanword, the suffix vowel tends to harmonize with the word-final vowel regardless of its type.
- 5) The vowel ‘*a*’ functions as a default vowel.
- 6) The vowel ‘*u*’ is sometimes ignored by vowel harmony because of its low sonority.

It is important to note that there is not an absolute order or ranking among these rules. Since some rules can be applied in the same circumstances, the result of vowel harmony varies by speaker or word.

These rules also show that non-initial vowels are sometimes reduced even in loanwords, though this reduction is not systematic but lexically determined. In addition, they show that there is an interaction between vowel harmony and vowel reduction.

受領日 2013年9月17日

受理日 2013年12月5日